

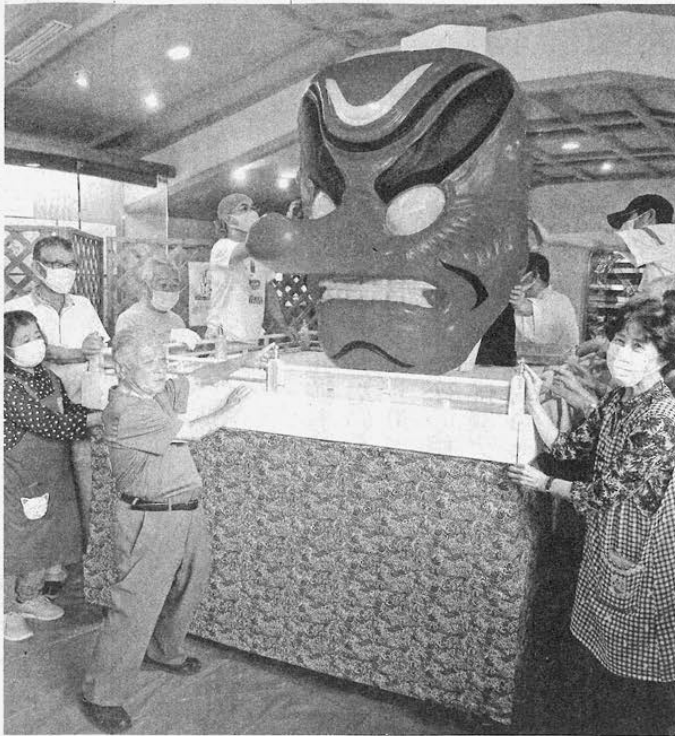
大祭「曳き物」令和に再現

姫路市総社本町の播磨国総社で20年に1度営まれる「三ツ山大祭」で、江戸時代まで行われていた謡囃子に登場する「曳き物」を再現しようと、氏子らが巨大天狗の面と台車の製作に取り組んでいる。10月1日から総社で開かれる「造りもの展」でお披露目される。(新良雅司)

播磨国総社氏子ら製作

三ツ山大祭は、自然崇拜の祭礼。前回は2013年に対象だった山をイメージした高さ18呎、直径10呎の「置き山」を境内に3基造り、その頂上に全国各地の神々を迎え

訪れた。謡囃子は、鎧兜や華麗な衣装を身につけた集団が花木



播磨国総社の氏子らが製作した天狗の面と台車(姫路市で)

来月お披露目 巨大天狗と台車

など様々な造り物を載せた台車を曳き、大傘を持つなどして、鉦や太鼓、三味線を演奏しながら山を目指して踊り歩く芸能。1854年の「播磨姫路総社臨時大祭礼曳物略図」など江戸時代の絵図にその様子が描かれているが、明治以降は行われなくなったという。

氏子らが2015年に結成した「一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会」は、大祭の伝統を次世代に継承しようと、毎年1月に総社で開催される「初ゑびす祭」の宝恵駕籠行列で、



2013年の三ツ山大祭に登場した3基の「置き山」

19年から謡囃子を実施。同年に鎧兜を、昨年は大傘の製作に取り組んだ。

今年8月から会員ら16人が約30時間を費やし、総社にある猿田彦の面を参考に、発泡スチロールに紙粘土を貼り、赤の塗料やニスを塗るなどして、縦1.5呎横1.2呎の巨大な天狗の面を作った。鼻の長さだけで75センチもある。

指導したもののづくり作家ドゥノヨシノブさん(47)(たつの市)は「天狗の表情、色合いとも素晴らしい出来栄になった。会員の努力のためものだ」と評価する。台車は1・8呎四方、高さ1・1呎の木製で、欄干に色を塗るなどして9月中旬に完成する。

保存会の田中種男会長(93)は「姫路市の活性化にもつながるよう、華やかだった江戸時代の大祭を令和の時代に忠実に再現し、国の重要無形民俗文化財指定を目指したい」と意気込んでいる。

造りもの展は総社御門2階で、10月30日まで。入場無料。鎧兜や大傘、17年度に製作した10分の1サイズの置き山の模型も紹介する。いずれも来年1月の謡囃子で披露される予定。問い合わせは総社(079・224・1111)へ。